



TITLE:

サル類保険健飼育管理施設(I 研究所の概要)

AUTHOR(S):

松林, 清明; 後藤, 俊二; 鈴木, 樹理; 松林, 伸子

CITATION:

松林, 清明 ...[et al]. サル類保険健飼育管理施設(I 研究所の概要). 霊長類研究所年報 1987, 17: 30-31

ISSUE DATE:

1987-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/163747>

RIGHT:

- 3) 東 滋：サルと森と人—ひとつの生物的自然の歴史—，同上（再録）。79～87。
4) 足沢貞成：今冬の調査結果の概要。「さるとひば」（1986. 1. 10）

学会発表

東 滋（1986）：下北西北域のニホンザルの個体群の動きと森林の変化。日本哺乳動物学会第1回大会，横浜国大にて。

サル類保健飼育管理施設

松林清明（施設長・兼）・後藤俊二・鈴木樹理
松林伸子⁰

61年度は研究所における実験用サル類の飼育および研究使用に関して大きな転換が為された年であった。従来のサルの研究使用とくに実験中の拘束に対して，欧米から批判が寄せられたことに端を発し，サル類の取り扱いを見直す動きが具体化した。即ちサル委員会を中心に，米国N I Hのガイドライン（1985年改訂版）に基本的に準拠した「サル類の飼育管理および使用に関する指針」を研究所独自にまとめ，またこの指針で定めた規格に合わなくなった現有の飼育ケージを全面的に更新する為の予算化が図られた。上記指針は，サル類の飼育や使用に際して，動物に無用な苦痛を与えない事を主眼としたもので，場合によっては実験手技さえ制限する厳しいものであり，これがきちんと守られているかどうかを監視する委員会の設置も義務づけている。当研究所のこの措置は，国内の他の研究機構にも影響を与え，いくつかの学会・大学で，動物実験のあり方を規制または再検討する気運が高まっている。当施設は直接サル類を扱う部署として，この問題に対して今後も大きな責任をになってゆかねばならないだろう。

研究活動としては，松林（清）・後藤の2名が，マカクの種分化に関する海外学術調査の一環として，ミクロネシア・パラオ共和国のアンガウル島で，カニクイザルの捕獲調査を行った（11月～12月）。業務面では，飼育ザルの所内繁殖は年間に97頭，病気等による死亡は51頭という実績で，自家繁殖態勢・保健管理業務ともにほぼ平常状態に

安定してきたと云えよう。人事面では，事務補佐員であった伴野芳枝，飼育担当の春原則子両名が退職し，後任に非常勤職員として今井志江（事務担当），東俊之（飼育担当）の2名が採用された。

研究概要

1) サル類の繁殖に関する研究

松林清明

チンパンジー精液の凍結保存法について，引き続き検討を重ねた。また所内で生まれたマカクの第二次性比および1才性比を調べ，飼育下における性差を調べた。

2) 実験動物としてのサルの開発の研究

松林清明

パラオ共和国アンガウル島に約80年前に少数導入されたと云われるカニクイザルの遺伝的変異性を調べる為，現地で70頭を捕獲，サンプルを持ち帰った。現在分析を行っている。

3) マカク類の成長に伴う眼内視所見の推移

後藤俊二

各種マカク類を対象に，加齢による屈折率や眼底像の形態変化等について，単色光撮影法を応用し観察を行っている。

4) サル類寄生虫症の疫学的・臨床病理学的研究

後藤俊二

各地の野外生活ニホンザル群を対象に，消化管内寄生虫相の，生息環境による差異や季節変動等について調査を行っている。また，飼育下における伝播や腸炎発生と原虫相の関連等についての研究を進めている。

5) サル類の成長の生理学的および形態学的研究

鈴木樹理

各種サル類の成長を，血中各種ホルモン・酵素などの計測並びに生体計測によって解析した。カニクイザル・ニホンザル・アカゲザル・タイワンザル・ボンネットザルについて研究を進めている。

6) サル類疾病の病理学的研究

鈴木樹理

本研究所および野外で死亡したサル類について，主に，死亡率の高いと思われる出生直後から幼若齢までの死亡例を中心に，病理学的検索を行い，そのおもな原因および年齢による疾病傾向および各種疾病の病理形態の解明を行った。

1) 教務職員

論文

- 1) Matsubayashi, K., Gotoh, S. and Suzuki, J. (1986): Changes in import of non-human primates After Ratification of CITES (Washington Convention) in Japan. *Primates*, 27: 125-135.
- 2) 金城俊夫・坂井智恵・市川 隆・源 宜之・松林伸子・松林清明 (1986): サル糞便からのカンピロバクターの分離。岐阜大学農学部研究報告書, 51:207-217.

報告・その他

- 1) 松林清明 (1986): サル学の一大拠点。実験医学, 5:89-91.

学会発表

- 1) 松林清明 (1986): 類人猿の人工繁殖の現状。第30回プリマーテス研究会。
- 2) 鈴木樹理・後藤俊二・松林清明 (1986): サル類乳幼児死亡例の疾病傾向について。第2回日本霊長類学会。
- 3) 手越達也・松本芳嗣・山田 稔・吉田幸雄・後藤俊二・鈴木樹理 (1986): *Macaca* 属サル類における *Pneumocystis carinii* の感染。第55回日本寄生虫学会。
- 4) 山田 稔・松本芳嗣・吉川尚男・手越達也・塩田恒三・吉田幸雄・後藤俊二・鈴木樹理・中村 剛・別所伸二 (1986): ヒト由来 *Blastoecystis hominis* とサル・トリ由来 *Blastoecystis* spp. の形態的特徴。第42回日本寄生虫学会西日本支部大会。
- 5) 千種雄一・塩飽邦恵・角坂照貴・金子清俊・後藤俊二 (1986): サル糞線虫自由生活世代の発育に及ぼす集卵法の影響。第42回日本寄生虫学会西日本支部大会。

1986年度(昭和61) サル 類 動 態 表

区 分 種 名	入 荷			出 産	実 験 殺	外 傷 死	管 理 失 宜	死 因			
	校 費	科 研 費	寄 附					呼 吸 器 系	消 化 器 系	循 環 器 系	そ の 他
コ モ ン ツ パ イ								1			2
オ オ ガ ラ ゴ		2			2						1
コ モ ン マーモセッ											3
ワ タ ボ ウ シ タ マ リ				5		2					1
ヨ ザ ル				1							1
リ ス ザ ル	4			1	1						1
フ サ オ マ キ ザ ル			1								
ケ ナ ガ ク モ ザ ル				1					1		
ミ ド リ ザ ル			11	49	42	3	3	8	4		4
ニ ホ ン ザ ル				2	4		1			1	1
ヤ ク ニ ホ ン ザ ル				28	18			4	1		4
ア カ ゲ ザ ル				1	1	2		1			
タ イ ワ ン ザ ル	14			6	10			1			
カ ニ ク イ ザ ル				2	1						
ボ ン ネ ッ ト ザ ル					2						
ニ ホ ン ザ ル × ア カ ゲ ザ ル			5								1
セ レ ベ ス マ カ ク											
マ ン ト ヒ ヒ	7	3		1	8						
ア ジ ル テ ナ ガ ザ ル			1								
小 計	25	5	18					15	6	1	18
合 計	48			97	89	7	4	40			

1) 増加総頭数－減少総頭数＝差引増加頭数

$$145 - 140 = 5$$

1986年度末(昭和61) 飼 育 頭 数

種 名	頭 数	種 名	頭 数
コ モ ン ツ パ イ	7	ア カ ゲ ザ ル	207
ワ オ キ ツ ネ ザ ル	6	タ イ ワ ン ザ ル	15
オ オ ガ ラ ゴ	3	ブ タ オ ザ ル	4
コ モ ン マーモセッ	5	ベ ニ ガ オ ザ ル	5
ワ タ ボ ウ シ タ マ リ	13	ボ ン ネ ッ ト ザ ル	16
ヨ ザ ル	9	カ ニ ク イ ザ ル	36
リ ス ザ ル	4	ア ッ サ ム ザ ル	3
ノ ド シ ロ オ マ キ ザ ル	1	ニ ホ ン ザ ル × ヤ ク ニ ホ ン ザ ル	1
フ サ オ マ キ ザ ル	6	セ レ ベ ス マ カ ク	4
チュウベイクモザル	1	マ ン ト ヒ ヒ	8
ケ ナ ガ ク モ ザ ル	1	シ ロ テ テ ナ ガ ザ ル	2
ミ ド リ ザ ル	6	ア ジ ル テ ナ ガ ザ ル	2
パ タ ス ザ ル	2	オ ラ ン ウ ー タ ン	1
ミドリザル × パタスザル	2	チ ン パ ン ジ ー	10
ニ ホ ン ザ ル	391		
ヤ ク ニ ホ ン ザ ル	18	合 計	784